

先哲
格言
修身要訓

中華書局
三

K110,1

2

鎮江法會官教

七册

三〇號

二架

一八函

K110,

106

2.

東國

先哲格言

修身要

訓卷二

江中村鼎五編

第一章

○能く父母に事ふると

孝と云

爾雅

云

○能く兄小事へてもと

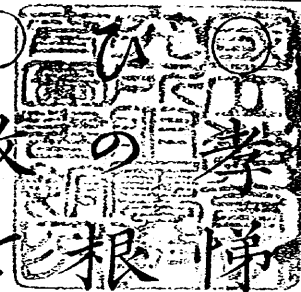
先哲格言

卷二

一

高橋堂藏版

らざるを、悌といふ童子訓



の二つは、人の行本ふり同上

○敬と以て長ふ事ふる

い、則順なり孝經

○順は、長者に事ふるの

道なり父子訓

○人とあをれむは仁を

り、人を敬ふは禮なり大和俗訓

第二章

○人遠き慮ふければ、必

近き憂あり論語

○萬の事つゝしめば行

をまづつゝしまざればす

たる 初學 訓

○小人を防ぐの道ハ己

と正しくするを先とす

治家 格言

○禍福門ふし、惟人の招

く所なり 左傳

○つとめハ貧にかち、慎

いむばをひふかつ 初學 訓

○志あるものハ、其事遂

ふ成る 漢光 武語

第三章

○身を立つるに、學を勉

むるを以て先とす 五種遺記

○學を勉むるに、書と讀

むと以て本とす 同上

○幼時より、專勤めて書

と讀み習ふべし、是一生

の身の寶とある 文訓

○玉琢りざれば器とな

さず、人學ばざれば道を

知らざ 禮記

○萬の事初めふ惰れば、

後に功ふし 大和俗訓

○事と處するの法は己

を正しくするを以て先

とす 畜徳録

第四章

○君子は人の美となし

欠 5頁

あり、仁を行ふの道は、人
と愛するふ何れ
五常訓
○仁ふれば則さかへ、不
仁なまば則えづりしめ
らる 孟子

第五章

先哲修身要則
六
中庸要義

○人禮あれば則安く、禮
なけまば則危し 禮記

○事大小とふく、只ま
とに理と以て主とすべし

畜徳
録

○我身に以うなる才能

善行ありとも、口に出し
て、ほこるべからず 大和
俗訓

○他人の長短と論せん
とせば、先我長短をかへ

願體
集

○君子い自ら責めて、人

と責めず、故に善と己小

求む

大和俗訓

○小人の人と責めて、自

ら責めず、故に善を人小

求む 同上

○第六章

○人の知ること、なから

んことと欲せば、為すこ

と勿れ 願體集

○寒と禦ぐに、衣を重

ぬるふ、志くは、し、謗と

息むるに、自ら修むる

に、ふくいなし

古諺初
學知要

○ 惡い小なるを以て、之
 を爲すこと勿れ、善い小
 なるを以て、爲さざるこ
 と勿れ 照烈語

○ 善となすに、怠ること

勿れ、惡と去る小、疑ふこ

と勿れ

從政
名言

○ 人山小はまづくこと
 莫くして、埴小はまづく

書經

○ 徳と脩むる者の、細行

K110, 1

格言修身要訓

卷二

中近堂藏板

と津、しむ

初學
知要

先哲
格言
修身
要訓
卷二
終

官許
東京中近堂

信前

滋賀縣士族
中村鼎五
東京府士族
中島精一
東京芝區三田國町三番地
滋賀縣大上郡彦根町松輪

明治十八年一月二十二日版權免許
年三月出版

定價金五錢

編者

滋賀縣士族

中村鼎五

出版人

東京府士族

中島精一

發兌

東京銀坐三丁目
大阪備後町四丁目
名古屋東本町
東京芝區三田國町三番地
中近堂支店
中近堂支店
中近堂支店

東京通言
全芝三島町
全本町
全通三丁目
全通二丁目
全馬喰町

丸善商社
山中兵衛
金山堂
稻田佐兵衛
北畠茂兵衛
石川治兵衛

東京横出町
全油町
大阪備後町
全南久壽町
栗河原町
全寺町

出雲寺萬次郎
水野慶次郎
梅原龜七
前川善兵衛
大黒屋太郎右衛門
田中治兵衛

